

## 現代人と新興宗教

静岡県立静岡  
商業高校教諭

一一 唐 資 朗

(一)  
機械文明は現代人を除々に疎外して来ている。文明の構造が複雑多岐にわたるに従って、疎外の状況は広範囲にあらわれるようになった。現代人がこの疎外状況の中でいかに過ごしてゆくかは、現代人の意識構造にかかわってくる問題である。即ち単独者として個人が自己として生きる時、その争が科学的なものへか、あるいは宗教的心情へと向かうかが問題となる。

日本が敗戦後獲得したものが民主主義であり、科学的精神であった。しかし日本人は、これら兩者を正しく行使しているとは結論づけるわけには行かない。何故かというに日本人は、明治的発想たる呪術的なものを所有しているからである。なかならず現代人の所謂二十代、三十代は、戦後の大部分を過ごし、戦後の民主的、科学的精神を所有しているにも拘らず、彼等の実生活には呪術的なものが支配的である。いやむしる現代人は疎外されている生活の中で、明治的、呪術的なものを培養して来たといっても過言でないであろう。いやむしる、現代人は社会という培養器の中で単にうごめいていたに過ぎないのである。

結果的にみて、やはり現代人は機械文明の中で明治的発想法と類似した行為を、意味もなく享樂生活に明け暮れることよって受け入れている。まさに呪術的なものを培養しているといえる。機械文明は現代人の生活を極度に変えたにはちがいないが、我々は現代人としての合理主義的・現実主義的な考えに徹底することが出来ずに、国民的な特徴といえる明治的・呪術的なものを、我々のコミュニケーションにおいて、意識的なものとして所有していることに注目しなければならぬ。それでは、明治的・呪術的なものを我々は次のように把握して行きたいと思う。

(二) 芳賀矢一は『国民性十論』の第一章「忠君愛國」の中で「皇室は力ミである。長土（カミ）である。神である」と述べることによつて明治精神を神道理念に結合し、弘布しようと努力している。天皇制絶対主義を強調する精神が日本の土壌となつて定着するためには長い期間がかつたといえるだろうが、問題はそれを受け入れた日本人の意識構造にあつたといえる。この構造はとりもなおさず、明治維新以前より引続いた民衆に根強い仏教思想と、神道理念との上になつたもので、明治に南花し、昭和の中期に迄及んだ。それがまさに怪物的存在となつて国全体を走り回り、悲惨な結果を引起したことは論ずる筈もない。敗戦後日本が大きな割前を払つて獲得したものが、民主主義であり、科学的精神であつたとするなら、それはまったく未来への希望となるだろうし、過去の決定的なる訣別をも意味するだろう。しかし、我々は我々自身をそのような単純さに身を委ねることは出来ない。それはまったく日本固有の国民性に向題があるからである。即ち日本人の国民性は、個人主義的理智的欲求を極度に否定しようとする所に特徴がある、といえないだろうか。これはまさに明治的、呪術的な意味を大いに含んでいるといえる。その顕著な例は、「義理」を重視する所にあるといえる。義理的なものは、人間に対してあらゆる科学的精神を疎外させる傾向にあり、この義理的感情は個人を強く束縛しどうすることも出来ないジレンマに陥れてゆく。何故ならば、自己の正当な行為が一介の義理的な忌によつて、挫折せざるをえないからである。義理的感情は自己をまさにその主従的要素の持つ性格によつて挫折させてしまふからである。この義理的感情は敗戦後の所謂戦後の谷向を越えて現代人にも支配的である。現代社会の支配的な無思想性は、孤独であるが故に人間的コミュニケーションを欲求し、そしてそのコミュニケーションは、義理的な感情を極度に昂揚してゆくことによつて人間的な回復を得たような錯覚に陥らせる。こういう意識が戦前迄支配的であり、そしてまた戦後も受け継がれて来ている。明治時代において個人の自覚がヨーロッパよりもたらされた時、このような意識を、根本より崩壊させ階級意識をも否定させるには、義理的感情から発した非合理的、呪術的なものが充分力を尽したといえる。このような意識を国民は培養し、そして非合理的な天皇絶対制の基礎づけを行ったといえる。

人は無思想性に陥って行けば行く程、感情面に走り易い。文化は平常「慎重さ」にあるといわれる。その「慎重さ」は今や影を薄くする傾向にある。その点でも日本人は、島国的狭量さを伴つて感情面を強調する。例えば

日本における重層信仰 (Syncretism) が絶対者と人間との厳格な区別をせず、種々な諸宗教を受け入れようとしてゐる面にも見られるように思われる。すなわち、日本人特有の単純さからくるのではないか。仏教を日本人がまったく異なったものに仕上げたことは、一面模倣と誤解される創造の精神があるといえるだろうけれども、日本の文化が殆ど外来文化に依存した端緒は、やはり一種の「単純さ」にあったといえるだろう。その「単純さ」は宗教においても、神や仏といった絶対者や人間の側に置こうとする特徴がある所に見られる。神仏を神聖なものにしようとも、絶対化しないという所に、安易さがあり、「慎重さ」がうかがわれないといえるのではないか。

日本の精神的土壌となりつつあった神仏が、西欧キリスト教と異なり、精神面に根をおさらずに終りをとけたということは、精神的なものの単に具象的な神りごとと終始し、日常の生活と切り離され、独立してゐることを意味している。この事は、文化の摂取に「単純さ」があつたのではないだろうか。その「単純さ」は裏をかえせば、まさに感情的なものと結びついて行く。従つて明治的・呪術的なものといふのは、「単純さ」から發して、一つの事象を高めることであつた。そのこと自体は批判もなく、無造作に受け入れられて行く。まさに宗教的心情が支配的である。

## (三)

現代人の感情的な面に走ることと、「単純さ」とは一面親近性がある。彼等は無思想的であるが故に精神の無秩序化を享受し、頹廢化しつつある。それは戦後の資本主義的發展の中で極度に蔓延しつつあり、悪循環をもたらしつゝある。その悪循環が急速に個人に迫つた時、急激な勢いで抬頭してきたのが、呪術的・感性的・迷信的な新興宗教である。既成宗教と新興宗教との厳密な区別は非常に困難であるが、次のような宗義ができるだろう。

すなわち「近代のなかのあるいはそれをささえる中世としての農村と」人家の多いなか」とよばれるような都会と」が、「仏教や神道とからみながら形成されてきた」民間信仰の「広い土壌になつた。資本主義が帝國主義の段階に入った二十世紀初期にこゝろいう背景をもつて登場したのが新興宗教であつた」<sup>4</sup>。

新興宗教が抬頭するとき、それは世紀末の現象としてとらえられ、そして世界の暗黒化を一身に受け發展する。戦後、新興宗教が急激に發展したのは、昭和二四年のドッジ・ラインが施行されてからであつた。当時の朝鮮動乱における経済發展は、勞働者に対して生活の潤いは生ませず、過重勞働を逆に強いるものであつた。そ

う中で世界でも類を見ない程に、新興宗教は各地に大衆運動を展開して行った。この大衆運動は個人の「欲求」をすなわち、生活難における欲求不満の解消をしてくれるものであった。マリノウスキーが欲求を基本的欲求（*basic needs*）と文化的欲求（*cultural needs*）とに分類して、宗教は人間の欲求から生まれるものとしているように、新興宗教の大衆化は個人の「欲求」をたくみに消化して、発展している。生活における不安・恐怖が個人を非合理的呪術的な新興宗教に向かわせている。こういう中から、天皇制絶対主義の崩壊は、新興宗教をそれぞれ天皇制宗教の「御稔威」のうまれ変りとして発展してきている。こういう新興宗教に現代人は何故に参加して行ったのであるのか。戦後の経済的不安定が一番大きな原因といえようし、又まだ伝道の時期にあり体系化されてないが故に、個人にとって具体的物質的な解決を与えてくれるという魅力が、あつたのかもしれない。

ここにも、先きにも述べたように「日本固有なもの」すなわち義理・人情といった感情的な面が十分に作用しているといえる。何故かというに、神仏が日本の理念の代表となりえなかったということ、すなわち既成宗教の理念が確立されなかったということは、日本人にそれを受け入れさせる度量がなかったこと、感情的なもので処理しようとする傾向が強かったからである。

米国の「パイオニア精神」、ソ連の「自由」といった理念は、日本ではうまれることなく戦後をすこしてきている。もういう意味では新興宗教の大教団は少なくとも、日本の理念を形成させてくれるものとなるかもしれない。しかし、新興宗教の非科学的な発想は、国家・文化に対する大きな汚点となる可能性もあるわけである。内面性の充実は、あくまでも科学的精神と民主主義においてなされるものでなければならぬ。ところが、新興宗教の特徴は、今ここでは述べないけれども、明らかに科学的精神を否定するものが多く、そして又、既成政治の反動性を迎合する所があるといえる。民主主義の理念といわれる「自由・平等」を歪んだ形で表現する面がある。彼等の大衆運動は、マスコミの利用とか、色々の方面で行われているが、特に現代の官僚制におけるピラミッド型に対して、押しつぶし型により、上部と下部との断絶を食止めようとしている所に、彼等の発展があつたといえる。この事は、人間的な連帯を強めることで大きな魅力となつてゐることは否定出来ない。彼等の内部は、理論家の着成を目指すことであり、外部に対しては、所謂信仰特有の奇蹟的なものを取りあげることによつて、在来の文化を平均化しようとする面がある。換言すれば、理論と実践とのつながりが、在来文化の迎合的姿勢と、

信者に対する魅力とを増加するために、具象的な不満の解消を自指すことによって、社会の諸問題を論ずるといふことを避ける方向にあるといえる。そういう意味では信者の相互の連帯感ほうまく調和するようであり、なかなか人間的なものを把握しているかのような錯覚に陥らせて行く。従ってその信仰熱は自己の内面性を極度に歪んだ呪術的なものの絶対化という仕方であり、形成して行くだろう。このことは、彼等が一般的な社会通念では、反動的・保守的要素を持つということから抜け出せないことを意味する。国民的通念がない中で、民族的イデオロギーあるいは科学的なものを、そのまま持ち出して歓迎されないからである。そういうことが彼等とことさらに反動的・保守的な要素に向かわせる。

故に過去において見られたように、既成政治に迎合的であり、リベラルな行動は、内部分裂を引き起す結果を引き起すにちがいない。科学的な哲学においては、あくまでも「人間的なもの」を合理性でもって、人個人の理知的な側面より把握追究して行くけれども、彼等は「家」という観念を強調することにより個人を否定し、そして又個人の状態を神に結びつけることによって、個人を否定する傾向にある。この否定は、逆に信者に熱狂的な歓迎を受けるのだから、まさにファナティックな新興宗教の特異性といわざるをえない。

彼等の「不安」は「自己の在り方」に根源を持つことであつて、政治的経済的な側面を必然的に無意味に迎合する。そのこと自体彼等にとって無意味であり、そして又新興宗教が、彼等に政治的な経済的なものと現実の生活との間を教えない。仮りに教理の中で、政治的経済的なものが語られたとしても、それは、「神」の名によって非科学的となる。彼等の「欲求」は、資本主義社会における問題の解決ではなく、「自己の罪」の解消を自指すことによつて満される。まさに既成宗教と交らない価値標準が支配的であり、民主主義的、科学的精神の価値顛倒が、大部分を占めているといえる。この価値判断の顛倒は、日本人の感情的なものと結合して、価値の謔弁化を矛盾としてとらえない所にあらわれる。従つて価値判断の顛倒は、新興宗教自体が弁証法的に運動しているようで、そうではなく、科学とも相容れることが出来るということ唱えながら、呪術的なものが支配的である所にも見られる。しかし宗教とは、魂の救済を目的とするが故に、どうしても呪術的なものを免れえないかもしれない。

謔弁化は彼等の組織が拡大して行く時にさらに増大し、ひいては現代人が当面している疎外をうむことになり

かねない。今迄の新興宗教が伝道の時期であつたならば、連帯意識がある意味で密接であつたにちがいないが、彼等が機械文明の中で存続するために、組織の強化を行うこと、特に事業を行うことによつて、疎外は避けられないだろう。例えば学校を設立した時、そこに入学希望の生徒が月謝を払えなかつたり、受験に失敗したりした時、彼が社会の不滿をそっくりそのまゝ、その学校にそして教団に対して持つだろう。社会における疎外を組織の中に見出す結果となる。その時新興宗教は理念上では解決が出来たとしても、現実的な彼等の行動では、社会と何ら変らない方法で組織拡大して行く。その限りでも、信者の中に疎外をうみだすこととなる。諛弁的要素が信者の感覚を満足させ、不安・悩みを解消して行くのだからこれでも、はたして新興宗教の理念は、個人の中にどのような精神的なものとして根ざすのか、感覚的満足が精神的反省を試みさせないような危険があるのではないのか。というのは、新興宗教の信者が大部分中間層以下に占められている時、彼等は同時に現代人としての要素を兼ね備えて、社会的な諸問題より遊離し、資本主義社会における矛盾を感じしようとせず、ただひたすらに小市民的な宗教心の体得で満足し、不滿を解消しようとするからである。まったく現代社会の疎外された現代人と同じように感覚的利那的刺戟（信仰）でもって解消するわけである。その解消がなされた瞬間に、はたして精神的な充実があるだろうか。むしろ具象的物質的満足が、彼等にことさら隣人意識や仲間意識をよび起すことはおろか、単なる物質的欲望に終始することによつて、精神的空虚さを隠蔽するに止まるだろう。そうなつた時信者はやはり現代人と何ら区別のつかない疎外人と化すだろう。組織の拡大は、他方では科学的なものを帯びたものを選びあるいは設立して行くことによつて、組織と信者との間に大きな溝が出来る可能性があると見える。従つて組織化された新興宗教は、既成宗教の述べた理論闘争をうみ、次第に合理化されることによつて形骸化して行くにちがいない。

(四)

(57)

以上ある意味では、新興宗教の信者と現代人とは、疎外の中で同じ状態にあるということとを述べたが、このことは新興宗教の欠点をあばいて、そこには害毒ばかりしか存在しないと非難することを、目指すものではない。文化は「下」からの高まりがあつて始めて、文化として活動し、効果がある。そういう意味から、「理念」が文化の原動力となるためには、「理念」が空虚な理念から抜け出すために、実践が伴つてこそ理念となりえ、そこ

に「文化」の意味としての効果をもつ。従つて、別な観点より新興宗教が自指す大衆運動には、文化としての「理念」を内蔵しているともいえる。組織化されてゆく教団は確かに疎外現象を孕んで行くだろうけれども、科学的なものを取り入れることによって、科学と握手するといった可能性もあるといえる。そういう意味から現代人が疎外されている中で信仰するものを持たないということは、一種の不幸であるといえるかもしれない。しかし現在、「理念」は現代人によつてそっぽを向かれています。享樂生活がそうしたのか、それとも社会の専門分化がそうしたのか、いずれにせよ、不条理が拡大するばかりである。従つて現代人は疎外されて行く自己の状況内から、「人間的なもの」を目指しての希望、換言すれば、「哲学をすること」を所有しなければならぬだろう。

自己の在り方を追求する態度を自己に要求しなければならぬ。その手段は社会の中における個人として捉えることによつて、社会の疎外化の促進を食止めるものとなるかもしれない。ここでは、その手段を述べることは、一面、新興宗教が目指しているイデオロギイと類似したものを、現代人が内面的に見極めようとする態度にあるといえる。従つてその態度は現代人が科学的世界の中に住んで、機械文明に対する科学的見方に帰着できるのではないか。そのことは日本の国民性が、感賞的・呪術的な発想法を所有していたけれども、それを否定する中で、現代人は社会における個人を自覚出来るといえないだろうか。

新興宗教が未明的な状況を捉えて発達したと同じように、現代人は精神の危機を深く認識することによつて反省を試みる必要があるだろう。ヤスパーズが「歴史の根源と目標について」で、「古い諸文化は枢軸時代に入り込み、新しい発端に吸収される所の諸要素の中にのみ存続する」と述べている。この事を一時代から次の時代への移り変りの特徴としてとらえるならば、まさに現代社会には、明治的・呪術的要素が存続しているといえるだろう。従つて我々が単独として生きるか、あるいは宗教的心情の中に生きるかということとは歴史の中で、そして文化の中で、いかに生きるか―疎外された小市民としてか、そして疎外化する宗教の中の信者としてか、あるいは自己をいかに歴史の中で価値づけるかという内面への問いかけをなすこと―が内題となるだろう。

とにかく、現代人は、いかに「人間的なもの」を把握するかによつて、自己の連帯性を保持する鍵を握っているのである。

1. 現代人といふ觀念規定を「大衆として把握することにする。丸山眞男著『日本の思想』の如く、近代的組織体のタコツボ化へ」  
 知識人が専門化した日本には、基盤としての文化を持たず、西洋と異なり閉鎖的であること」を述べている。従つて我々は其通の理念を持たずにいるといえる。故に我々は現代人として疎外の中で只単に「ゴ」いていたにすぎないのではないのか。

2. ルー入・ベユ本デイクト著、長谷川松治訳『菊と刀』上巻 一九六頁参照
  3. 芳賀矢一著『国民性十論』参照
  4. 佐木秋夫著『新興宗教』 五九頁参照
  5. 岸本英夫著『宗教学』 二一頁参照
  6. 佐木秋夫著『新興宗教』 四二頁より五〇頁参照
  7. 藤柳大蔵著『現代王国論』文芸春秋七月特別号参照
8. "Karl Jaspers" "Von Messung und Ziel der Geschichte" 紙装 版二五頁より二六頁

参考文獻

思想、世界、理想、小池長之著『日本の宗教史』ラトレイユ・シグフリード著『国家と宗教』  
 ベートランド・ラッセル著『宗教は必要か』テイリツヒ著『文化と宗教』  
 オルホート著『個人と宗教』グスタフ・メンシク著『宗教学史』  
 ゴルウイツァー著『自由の要求』鹿野政直著『明治の思想』